

参政権以降のイギリス文学と働く女  
——ポストサフレジズム／ポストフェミニズムの系譜

松永 典子

本論文は、21世紀のフェミニズムの否定言説に注目して、20世紀および21世紀のイギリス文学におけるフェミニスト・テキストを読むことで、フェミニズムの否定と肯定の言説の系譜を論じたものである。

2000年代後半以降、ポストフェミニズムを冠した研究がポピュラーカルチャーやメディア研究において盛んである。用いる論者によって異なる意味を持つが、ポストフェミニズムとは、1990年代後半に見られる新たな種類の反フェミニズムの動き——フェミニズムの目標はすでに達成されており、もはやフェミニズムが無用だとするような否定と肯定の状況——を指す。このような状況を批判的に考察しようとするのが2010年代頃からのポストフェミニズム研究である。1990年代からポストフェミニズム研究は見られるが、近年の研究者が指摘するのは、1990年代から始まるフェミニズムへの新自由主義的政策の影響である。たとえば、アンジェラ・マクロビーによる『フェミニズムの余波』(2008)は同研究の先駆的研究として知られるが、同書を筆頭に、ポストフェミニズム研究においては新自由主義に影響を受けた文化が注目され、消費や商業との関わりの深い雑誌・映像・写真といったポピュラー・カルチャーおよびメディア研究が中心に議論されている。

このような理解のもとに、本論においては、20世紀前半から21世紀までのイギリス文学——バーナード・ショー『聖ジョーン』(1923)、エヴァドネ・プライス『そんなに静かではない…』(1930)、協同組合に所属する労働者階級女性による手記集『私たちが知っている生活／人生』(1931)、ヴェラ・ブリテン『若者の証言』(1933)、ヴァージニア・ウルフ「斜塔」(1940)、セリーナ・トッド『ザ・ピープル』(2014)など——を取りあげ、ポストフェミニズムという現象が、果たして1990年代以降のポピュラーカルチャーもしくは消費文化固有の現象であったのかどうか、を議論する。新自由主義の影響に対する反応と呼ばれるポストフェミニズムを時間的かつ分野横断的に拡大し、20世紀初頭のいわゆるモダニズム文学と接続させて議論することによって、20世紀以降のイギリスのフェミニズム文学を連続体として捉えることを試みる。

第I部「ポストフェミニズムとは何だったのか？」では、ポストフェミニズムの議論の前提を再考する。第二章「フェミニズムの戸惑い——第二波フェミニズムの以前と以後の働く女たちの自己語り」では、第二波フェミニズムの運動（いわゆる「ウーマン・リブ」）において集団的なムーブメントの形成に貢献したとされる意識高揚運動に注目し、複数の時代のフェミニストたちの自伝的語りもしくは自己を語る叙述を検証することで、ポストフェミニズムの状況を概観する。1930年代の女性知識人作家による労働者階級女性による手記集への序文（モダニズム文学）、1970年代のウーマン・リブの文学（意識高揚小説）、1990年代の大衆文学（チック・リット）を取りあげ、フェミニスト的なアイデンティティ形成の生成過程を論じる。20世紀から21世紀にかけての複数の時代の自伝的語りを比較考察し、イギリス文学におけるフェミニスト的なモメントが、さまざまな可能性をみせながらも、20世紀前半からすでに、中断という結末を繰り返し迎えていたことを確認する。そのうえで、第三章「ジャンヌ・ダルクの主張——バーナード・ショー『聖ジョーン』にみる能力主

義」では、女性参政権獲得運動の象徴として用いられたジャンヌ・ダルク表象を描いた『聖ジョーン』を考察する。本作のプロットの鍵は、奇跡を起こすという人知を超えたヒロインの卓越した能力である。本作に描かれたフェミニズム的主張の挫折とメリトクラシーの物語を分析することによって、20世紀前半にすでに新自由主義的思想の萌芽が見られることを論じる。

第Ⅱ部「ミドルブラウ再考」では、ポストフェミニズムにおいて議論の中心となる働く若年女性の労働を再解釈するために、第一次世界大戦の従軍女性を描いたミドルブラウ小説二作を分析する。第四章『『若者の証言』をめぐる100年——「すべてをもつ」ことを夢みる女たち』では女性大学進学者第一世代でボランティア看護師として従軍したヴェラ・ブリテンが、別居婚・夫婦別姓などの既婚若年女性の課題を論じていたことに注目して、彼女の代表作『若者の証言』を考察し、ポストフェミニズム下における若年女性の課題「すべてをもつ」の萌芽が20世紀初頭に見られることを指摘する。第五章「チック・リットとしてのポストサフラジスト小説——エヴァドネ・プライス『そんなに静かではない…』におけるシスターフード・労働・自伝」では、エヴァドネ・プライスという大衆作家による従軍女性を描いた小説『そんなに静かではない…』を、ポストフェミニズムの小説と呼ばれるチック・リット小説の原型として再解釈することを試みる。

第Ⅲ部「女たちの夢とカタストロフィ」においては、フェミニズム文学研究においてなぜ政治・経済・産業・批評の文脈を踏まえた議論が重要になるのかを論じる。そのためにフェミニズム言説を牽引する知識人作家を取りあげる。第六章「英国アール・デコ時代のシスターフードの夢」では、イギリスのモダニズムの代表的な女性知識人作家ヴァージニア・ウルフと1930年代の男性知識人の論争をジェンダーの観点から再解釈する。知識人たちの論争の考察から、男女それぞれの知識人作家が、異なる前提で労働者階級と大衆ユートピアの夢を抱いていたことと、両者の夢がモノと社会および産業基盤をめぐって交差していたことを指摘する。そのうえで、いずれの企図においても大衆ユートピアが実現できなかったことを論じる。第七章「人びとの夢の世界を阻むもの——大衆ユートピアとフェミニズム」においては、21世紀現在、オクスフォード大学の歴史学の教授を務めるセリーナ・トッドが書いたベストセラーの歴史書『ザ・ピープル』を取りあげ、フェミニストの書き手がユートピアを夢想しながら、その夢がカタストロフィに陥ってしまう理由を議論する。トッドは社会主義的なアプローチからジェンダーの観点から労働者階級史を語り直したという点において評価される一方で、トランスジェンダー排除的言説でも批判されている。同時代の歴史学者によるフェミニスト的叙述を取りあげ、従来のポストフェミニズムという枠組みでは捉えることができなかったフェミニズムの問題点を明らかにすることを目指す。

以上のように、フェミニズムを肯定しながらも否定するポストフェミニズムという現象は1990年代に始まったものではなかった。本論が問うたのは、フェミニズムという複雑な現象を肯定のみで語ろうとするがゆえに、20世紀末の固有の現象のように語られているのではないか、ということであった。ポストフェミニズムという現象を考えるためには、大衆文化やメディア文化だけに限定するのではなく、ハイカルチャーとされた文学作品の分析とともに、文学言説の形成過程や緊張関係、それをとりまく社会・政治・経済・産業などを時間的に、また分野横断的に拡張して考察することが求められているのである。